

（スローガン）

一意専心

（はじめに）

昨年のスローガンは「夢の実現」でした。男子体操団体チームと内村航平選手はオリンピック2連覇で金メダルを獲得し、見事に国民の皆様の「夢」を実現してくれました。2005年から11年間、待ち続けた「夢」でした。また、その勝ち方も逆境の中でも決して諦めないという、戦後の廃墟から現在の経済大国を築き上げた、日本の誇りを彷彿させる勝利であったと存じます。

彼らの勝利は今の日本体操界へのメッセージでもあります。これまでの体操界を支えてきた学校教育での「部活動」は様々な要因で縮小傾向にあります。しかし、この困難な課題に屈することなく、今の子供たち、そして未来の子供たちのため、100年先のために、今回の勝利を機に一気呵成に、新しい「体操ニッポン」の歴史を創ることで、リオデジャネイロでの男子体操選手の勝利の価値をさらに高めなければなりません。

（リオデジャネイロ・オリンピックの反省）

男子体操選手の活躍に沸いたリオデジャネイロでしたが、ここで全体の成績を冷静にみてみましょう。

男子体操においては、最重点目標は「団体・金メダル」、「個人総合・金メダル」に加え、種目別でも2つの金メダル、その他にもメダルを3つ、合計で4つの金メダルを含む7つのメダル獲得という高い目標を設定しました。これに対して結果は、団体・金、個人総合・金、種目別跳馬・銅、というメダル7つの目標に対してメダル3つという結果でした。

女子体操においては、団体第3位という目標に対して第4位。個人総合第8位入賞という目標に対して第8位、種目別でもメダル獲得をという目標は達成出来ませんでした。

新体操においては、団体でメダル獲得という目標に対して第8位にとどまり、個人総合も第8位入賞の目標に対して第16位にとどまりました。

トランポリンの目標は、男子がメダル獲得、女子は5位入賞でしたが、男子が4位、女子が13位という結果でした。

4年後の2020東京オリンピックでは、リオデジャネイロ・オリンピックでの目標以上の成果が求められます。特に今までのオリンピックと違いメダルの獲得数を大きく問われるオリンピックとなります。大胆な目標と緻密な計画をもって、国民の皆様の期待に応えなければなりません。

(2017年世界選手権での目標)

リオデジャネイロ・オリンピックでは各種目ともに、高く設定した目標は達成できなかったものの、想定範囲内の結果だったと言えます。「2020東京オリンピック」に向けての道筋はつけられたと存じています。ここからさらに進んでいかなければなりません。

2017年の各世界選手権の目標は次のとおりです。

男子体操 個人総合(金メダル)、種目別(金メダル)を含む複数メダル獲得

女子体操 個人総合8位入賞、種目別メダル獲得

新体操 団体種目別メダル獲得、個人総合8位入賞

男子トランポリン 個人、シンクロ、団体メダル獲得

女子トランポリン 個人8位入賞、シンクロ、団体メダル獲得

我々は既に「2020年東京オリンピック」の列車に乗り、列車は動いています。

2016年リオデジャネイロ・オリンピックの勢いをそのまま一意専心攻め込んでいきます。

(一般体操)

日本が世界に先駆けて超高齢化社会を迎えるにあたり、社会の大きな問題となるのが社会保障費・医療費の増加です。介護に至らない健康寿命を延ばすことが日本の重要課題となってくるなか、一般体操が社会に果たす役割は、さらに大きくなって参ります。高齢者が手軽に楽しめるスポーツのコミュニティを、より多く作っていくことが私たちの社会の中で果たす役割であり、一般体操の存在価値です。

そのために本協会は、一般体操の「全国の組織化」、「一般体操指導者の育成」、そして「地域体操祭の開催」と体制の整備を進めて参りました。今後は、これまで努力して創ってきた各地のコミュニティにいかに高齢者を取り込んでいくかが課題となって参ります。

「2020東京オリンピック」は競技スポーツの頂点の祭典ですが、オリンピックとその前後は一般体操愛好者を伸ばす絶好の機会です。「2020東京オリンピック」に向けて様々なイベントを企画し、これまで地域の活性化に邁進してきた勢いをそのままに、高齢者の取り込みも行います。

一般体操を通じて、国民が運動を楽しみ社会参加できる機会を供給することで、国民の健康寿命を延ばし社会に貢献して参ります。

(アクロ体操)

いよいよ、「2018年ブエノスアイレス・ユースオリンピック」よりアクロ体操が正式種目となりました。このように欧州やアメリカでは人気のスポーツであるのに対し、国内においては全く普及啓蒙されていません。このような状況を危惧し、一昨年より「日本スポーツアクロ体操協会」を本協会に統合し、「アクロ体操委員会」としてアクロ体操の普及啓蒙に取り組み始めました。しかし、その足取りは遅く、未だに選手数は1ケタというのが実情です。

今年度より、新たに担当役員を配置し、積極的に取り組むことと致します。アクロ体操は高価な器具は必要としないため、体操が十分に普及していなかったアジアやアフリカ地域での発展が予想されます。世界各国の動きに出遅れることなく、環境を整えて参ります。

(男子新体操)

「2016年リオデジャネイロ・オリンピック」の閉会式にて男子新体操(団体)が演技を披露したことで男子新体操の注目が高まりました。男子新体操は、これまでも数えきれないほどメディアで取り上げられてきました。メディアに取り上げられた数からすれば男子体操に次ぐほどです。しかし、現実にはメディアの露出数と普及発展とは比例関係になっていません。

現在の男子新体操は「見るスポーツ」としては素晴らしい成功を得ていると言えます。選手たちの演技の芸術性、熟練度は増し人々に感動を与える素晴らしいスポーツへと成長しました。今後は現在の「見るスポーツ」から多くの愛好者がいる「するスポーツ」への変革が必要となってきます。

男子新体操は(女子新体操とは異なる)高額な「ゆか」マットを使用すること、そして、男子新体操の団体は手具を利用しないことから、本協会は数年前より男子新体操(団体)とアクロ体操との融合を推進してきましたが、残念ながら順調に進んでいるとは言い難い状況です。地域での普及発展のためには国体への復活が不可欠であり、男子新体操が国体に復活するためにはオリンピック種目であることが必要となります。現在のままの「ショースポーツ」としての発展に軸足を置くのか、「国際化した競技スポーツ」に変革していくのか、引き続き検討を続け、全国で頑張っている男子新体操選手たちが世界を目指せる環境整備が整えて参ります。

(指導における暴力、セクハラへの対策強化)

2013年に他競技での暴力指導が発覚した際に、本協会は他競技団体に先立ち、直ちに「指導における暴力、パワハラ、セクハラ撲滅運動」に取り組み始めました。昨年の2016年末にはアメリカでは関係者におけるセクハラが発覚し世界中でスキャンダルとなりました。今後は国際体操連盟も本問題に積極的に取り組む姿勢を示し、IOCもこれを支援する体制を整えました。全世界的な取り組みが始まります。

本協会は「3つの基本方針」をもって対策に取り組んでいます。第一に「暴力、パワハラ、セクハラが発生しない地域全体で監視する環境づくり」、第二に「指導における暴力を無くす指導方法の享受」、第三に「永久追放を追加した罰則の強化」です。指導における暴力、パワハラ、セクハラが完全に撲滅されるまで、本協会と加盟団体が協力して厳しい姿勢をもって取り組み続け、「指導における暴力、パワハラ、セクハラは存在しないことがあたりまえ」の体操界をつくって参ります。

(2020東京オリンピックと地域活性化)

昨年の国際体操連盟・総会時に参加国の「2020東京オリンピック事前調整合宿地」の誘致活動を実施しました。その場で誘致が決定したところもあれば引き続き誘致活動が行われているところもあります。全世界から集まる体操ファミリーをもてなし、友好を深め、地域の活性化、レガシーの創造に役立てて参りたいと存じます。各地域においては「2020東京オリンピック」を体操普及啓蒙の千載一遇のチャンスととらえ、日本代表選手の活躍とともに体操の普及啓蒙活動に取り組んで参ります。

(むすび)

昨年はリオデジャネイロ・オリンピックでの内村航平選手をはじめとする選手の活躍と、渡辺守成氏の国際体操連盟会長への就任という、「日本代表選手の強化」と「世界での発言力の強化」が実った年でした。

残る課題は国内の地域の活性化、体操の普及啓蒙です。国際政治力をつけて、日本代表選手の活躍にさらに弾みがつけば、あとは皆が一意専心に取り組み、体操は普及発展し勝利のサイクルが完成します。

そういった意味を込めて、今年のスローガンを「一意専心」とし、一意専心に皆で努力をして参りたいと存じます。

以上、平成29年度(公財)日本体操協会政策方針です。皆さん、一緒に頑張りましょう。